校長室の小窓から・・・

－№.４－　令和８年５月19日（火）　金光八尾中学校高等学校　校長　松井 祥一

先人の生き方に触れよう

中間考査１週間前となりました。目標達成に向けて全力で取り組んで下さい。

先日、廊下を歩いていると高校生諸君が「古文がつまらない」と話しているのを耳にしました。確かに現代で使う機会のない言葉の意味や文法を学ぶ意義はわかりづらいものです。「先人の生き方に触れる」などと説明しても、中高生には説得力がありません。私は「昔の人も私たちと同じように悩み、笑っていたはずだ」という視点を大切に、共感や新たな気づきを求めて古文を読むよう心がけています。

奈良公園に行ったときのことです。春日大社参道の萬葉植物園に飛鳥時代の歌人、柿本人麻呂を御祭神とした「歌泉堂」があります。そこで「お名前を“火気(かき)の元(もと)　非止(ひと)まる”と訓んで火難除けの神様としての信仰」という札を見つけました。「火気の元（かきのもと)、火止まる（ひとまる)」という語呂合わせですが、「偉大な歌人だから崇めなさい」ではなく、「名前が火消しっぽいから消防の神様にしちゃえ！」という古人のセンスに感心しました。

平安貴族の在原業平が主人公となっている『伊勢物語』の第 23 段「筒井筒」は、自分でしゃもじを持ってご飯をよそっている高安（八尾市）の女の無作法な姿に幻滅した業平は、その女のもとに通わなくなったという話です。それ以来、高安の里では業平がやってきた東側に窓をつくることを縁遠くなるから忌み嫌うようになったという伝説があります。私は、教え子たちと業平が通ったという高安神立地区の家々の様子を見に行きました。すると確かに東側に窓は少ないのです。地元の人に尋ねてみると、山手の東側に窓があると家の中が丸見えになるから避けているのだということでした。それを伝説にしてしまう古人のウイットに生徒たちも興味津々でした。もう 30 年ほど前のことですが、今で言う探究学習です。

こういったことが「先人の生き方に触れる」ということではないでしょうか。古文には先人の経験、知恵、そして失敗や葛藤が面白可笑しく綴られているものが多いのです。嫌々覚えたことはすぐに忘れてしまいますが、物語の面白さを知ってから、単語や文法を学ぶと意外に理解できるものです。

「古文がつまらない」と思っている諸君のヒントになれば幸いです。